

原著論文

## 幼児期の子どもを養育する夫婦のcoparenting

### Coparenting in child-rearing period of childhood

徳岡麻由 (Mayu Tokuoka)<sup>\*1</sup> 長戸和子 (Kazuko Nagato)<sup>\*1</sup>  
瓜生浩子 (Hiroko Uryu)<sup>\*1</sup>

#### 要 約

**目的：**本研究の目的は、1-5歳の幼児期にある子どもを養育する夫婦のcoparentingの実態を明らかにし、幼児期の子どもがいる家族への効果的な看護支援への示唆を得ることである。

**方法：**武石らによって開発された「日本語版coparenting関係尺度 (CRS-J)」を開発者の承諾を得て用い、複数の保育施設に入園している1-5歳の子どもの両親を対象として自記式質問紙法による量的記述的研究を行った。

**結果：**父母268名のデータを分析した結果、coparenting合計点の平均は母親 $2.39 \pm 0.9$ 点、父親 $2.81 \pm 0.7$ 点で、父親が高く父母間で有意差がみられ、父親の方が調和的なcoparentingであった ( $p < .01$ )。また武石ら (2017) の先行研究の対象者である、「第1子の0歳児を養育する両親」よりも、本研究の「1-5歳の幼児を養育する両親」の方が調和的なcoparentingであった。

**考察：**coparentingには性差がみられること、また先行研究との比較から、coparentingは児の成長や家族の発達と共に変化することが示唆された。このことから、幼児期にある子どもを養育している夫婦が共に、子育てを「家族全体の取り組み」として位置づけ、夫婦で協働し育児に取り組むという認識への転換を促す支援や、家族発達を促進する支援が重要であると考えられた。

#### Abstract

**Purpose:** The purpose of this study is to determine the current status of coparenting among couples caring for young children between the age of 1-5 years and to obtain suggestions for effective nursing support for families with children in young children.

**Method:** The Japanese version of the Coparenting Relationship Scale (CRS-J) developed by Takeishi et al. (2017) was used with the permission of the developers to conduct a quantitative descriptive study. A self-administered questionnaire method was employed on parents of children aged 1-5 years, who were enrolled in multiple childcare facilities.

**Results:** After analyzing the data from 268 parents, the mean co-parenting total score was  $2.39 \pm 0.9$  for mothers and  $2.81 \pm 0.7$  for fathers, with fathers having higher and more significant differences than mothers, as well as fathers having more awareness about “rearing with their partners” and “cooperative efforts” ( $p < 0.01$ ). In addition, parents caring for toddlers aged 1-5 years in this study expressed experiencing more harmonious co-parenting than parents caring for their first child aged below 0 years, which was the subject of the previous study by Takeishi et al. (2017).

**Discussion:** Gender differences in coparenting and comparison with previous studies suggest that coparenting changes with the growth and development of the child and the family. This suggests that it is important for couples raising young children to treat child rearing as a “family effort” and provide support that encourages a shift in perception to one in which couples work together to raise their children, as well as one that promotes family development.

キーワード：coparenting 幼児期 子ども 夫婦

<sup>\*1</sup> 高知県立大学看護学部

## I. はじめに

核家族化や母親の産後うつ、児童虐待の背景を鑑みると、両親がともに協働して育児を行うことができるような取り組みや政策の充実が必要となる。しかし性役割分業観の根強い日本では、男性の子育てはあくまでも「参加する」「協力する」というスタイルから抜け出せないでいる(吉沢, 2014)。周産期の看護では父親を含めた家族へのケアが浸透してきたが、妊娠出産、子育ての主軸は母親という認識で、父親に母親のサポートを求める情報提供や両親学級をしている現状がある。

一方で母親自身が父親の育児関与を阻んでいることや(加藤, 2012)、父親のうつ(佐藤, 2020)も報告されている。このことは、単に父親の子育て参加を促したり、夫婦が育児や家事を平等に分担すればよいということではなく、母子、父子、父母システムといった三者の関係性を考慮しつつ、夫婦が共に取り組む育児の様相に焦点をあてる必要性があることを意味する。青木(2009a)は、夫婦間での相互理解や調整は、実際の育児の分担の衡平さと同様に重要であると述べている。大島(2015)は、夫婦が良い関係性を築き、協力して、時に葛藤を感じながらも子どもに関わることは、子どもの発達だけでなく、親の発達にとっても有益であるとし、夫婦が共に協力して子どもの養育を行う「coparenting」の重要性を述べている。

coparentingとは、「両親が親としての役割をどのように一緒に行うかということであり、育児へ向き合うことの責任、役割意識の共有、協力の程度や行為を含む」(Feinberg, 2003)と定義され、欧米においては、養育者同士が協力やサポートをし合いながら行う育児や、coparentの特徴、条件など、有用な知見が積み重ねられてきた(McHaleら, 2011; Van Egerenら, 2004)。一方で、「親であること」、「親としての役割」をペアレンティングと言い、これは「次の世代を生み育てていくという、我々の発達課題をはたしていくプロセスにおける役割行動」と解釈されている(鵜養, 1992)。ペアレンティングとcoparentingは混同されやすく、明確な境界を設定することは容易でないが、coparentingは単に、

パートナーとしての夫婦関係の相互作用のみならず、親としての父母関係という別の役割間に生じ、子どもの発達や家族システムに独自の影響力を持つと言われている(加藤ら, 2014)。

河野(1996)は、調和的な夫婦関係は応答的で敏感なペアレンティングと関連し、それにより子どもとの安定した愛着関係やコンピテンスの発達をもたらすが、対立やストレスなどの多い夫婦関係では、効果的なペアレンティングはなされず、子どもの問題行動とも関連があると述べている。このことは夫と妻が同時に親でもあることから、そのストレスを補完し合える関係にあるかどうかということと関わる。つまり親としての連携は、夫婦関係の延長にあり、父母の子への関わりに影響する。その為coparentingサブシステムは、夫婦サブシステムやペアレンティング(親子)サブシステムと区別されなければならない(Cowan&Mchale, 1996)、と考えられている。

またVan Egerenら(2004)は、coparentingを他の家族システムと区別するための基準を示している。一つ目は子どもの存在であり、子どもの出生後に加わった子どもの為の家事は、coparentingの指標であると述べている。二つ目はパートナーの存在であり、これは親子のサブシステムであるペアレンティングと大きく異なる点である。三つ目として、coparentingはパートナー間の双方向の関係性の中で影響し合うプロセスがあるとされている。また、coparentingは本質的には父母の二者関係であり、他のサブシステムとの関係を含めて家族全体としての特徴になる、という点も挙げられている。夫婦は子どもを持つことでcoparentingユニットとして機能しはじめ、互いにパートナーを尊重し、サポートし合う中での父母同士の関係が、子どもへの関わりに影響する。そのためペアレンティング以上にパートナーの特性や要因が自らの振る舞いに影響を与え、与えられるというプロセスがあるとされる点がcoparentingの特徴であり、重要な点である。

Feinberg(2003)は、【育児の合意】【サポート／阻害】【育児・家事の分担】【家族の絆】の4つの構成概念を操作化した6つの下位尺度「育児の合意」「子どもの前でのめごと」「サポー

ト」「阻害」「パートナーの育児の承認」「家事・育児の分担」に子どもの発達やパートナーの成長、親として協力する経験を共有することへの喜びで構成される「育児による親密性」を加え、35項目から成るCoparenting Relationship Scale (CRS)を開発している。そして武石ら(2017)は、Feinberg開発のCRSを翻訳し、「日本語版coparenting関係尺度(CRS-J)」を開発している。ここでいう【育児の合意】とは、子どもをどのように育てるかについて、それぞれの親の考えが近いかどうかであり、道徳観、期待する行動やしつけ、子どもの要求、教育や安全、ピア関係(夫婦関係)などが含まれる。意見の相違は対極に位置づけられているが、意見の相違があっても相違点について話し合うことができれば、意見の相違自体が家族全体に悪影響を及ぼすことはないとされる。【サポート/阻害】の「サポート」とは、パートナーの親としての能力を肯定すること、育児関与を理解し尊重すること、育児に関する意思決定や権限を支持することであり、「阻害」とはパートナーを傷つけるような批判や軽視、非難である。【育児・家事の分担】とは、親同士がそれぞれどのように責任をもつか、育児ストレスや抑うつ、親役割に対してサポートを感じているのかを示し、労働の量的平等ではなく、家事・育児の責任をどう分担するか、どう共有するかに対する満足感である。親同士が話し合っただのような分担の仕方をするのかを話し合うことが重要とされる。【家族の絆】とは、親が子どもを含む家族メンバー全員の相互関係を調整する、三者以上のメンバーとの関係性である。子どもに対する親同士の関係(夫婦関係)は、家族全体の相互作用の中で、親自身の育児関与を規定し、変化させるため、親同士のけんかが子どものアウトカムおよび親自身のアウトカムに悪影響を及ぼすとされている。

これまで日本では、父母の養育行動をそれぞれに捉えたり、子育て期にある夫婦の関係性に焦点を当てた研究が多く(小川, 2009; 浦山, 2015; 松永, 2015; 中島, 2016; 亀崎, 2018; 寺見, 2017)、子どもを含む三者の関係性の中での、親同士の子どもへの実際の関わりにおける協働や調整といった、父母関係の相互作用については検討されていない。「日本語版coparenting関係

尺度(CRS-J)」を開発した武石らの研究(2017)では「第1子の0歳児を養育する両親」を対象にcoparentingの実態が検討されているが、幼児期の子どもを養育する親を対象とした研究はない。以上のことから、幼児期にある子どもを養育する夫婦のcoparentingの実態を明らかにすることは、幼児期の子どもを含む三者の相互作用を通じ、夫婦が共に関わる育児の様相を知ることにつながり、幼児期の子どもを養育する夫婦の家族機能への理解の深化と看護支援への示唆を得ることができると考える。また、育児期における家族は、家族員にとって第一義的なサポート資源であるといえる。その為、家族を拡大する中で取り組むべき育児という、家族の発達課題に対し、家族の健康や発達を左右する重要な役割機能である家族サポートとcoparentingとの関連性を明らかにすることは、そうした相互扶助の過程が父母の育児への取り組みにどのように影響するのかを知るための一助となると考える。今回、本稿ではcoparentingの実態に焦点をあてて報告する。

## II. 研究目的

本研究の目的は、1-5歳の幼児期にある子どもを養育する夫婦のcoparentingの実態を明らかにし、幼児期の子どもがいる家族への効果的な看護支援への示唆を得ることである。

## III. 研究方法

1. 研究デザイン 質問紙を用いた量的記述的研究デザインである。

### 2. 用語の定義

coparenting: 両親が親としての役割をどのように一緒に行うかということであり、育児へ向き合うことへの責任、役割意識の共有、協力の程度や行為(Feinberg, 2003)。

「夫婦」: 日本の民法752条に基づき、「同居、協力、扶助」の三つの義務を有している婚姻関係にある男女。

「育児期」: 生まれてきた子どもを、心身ともに社会生活が可能となる年齢になるまでの間、直接

子どもに関わる行為（世話、社会化）だけでなく、子どもの成長・発達の基盤を支える行為（扶養）を含め養育する過程を営んでいる期間（住田ら, 2010）であり、本研究では就学前で日常生活に親の世話を量的にも多く必要とする1-5歳の幼児を養育している期間と操作的に定義した。

### 3. 調査方法

調査はA県内の複数の保育施設で実施した。調査期間は平成30年7月～11月である。対象は、子どもを養育する責任を有し、その認識があり、直接的な育児に日常的に関わっており、調査時に1-5歳の幼児と同居している両親である。承諾の得られた調査施設より対象の両親に研究概要、倫理的配慮について記載した文書と質問紙及び返信用封筒を配布していただいた。依頼時には父親用、母親用の質問紙と返信用封筒をセットとして同封し、どちらか1名での回答でも構わないこと、夫婦で回答いただける場合も別々に返送いただきたいことを説明し、質問紙の返送をもって調査への同意を得たことを確認した。調査は所属大学及び調査実施施設の倫理委員会からの承認を得て行った。

### 4. 調査内容

質問紙はフェースシート、coparenting、家族サポートに関する質問紙による3部構成とした。

#### 1) フェースシート

対象の年齢、婚姻期間、家族構成、学歴、就労状況、coparentingに関連する予測因子として子どもの就寝状況、育児サポートの有無、育児情報源、育児の悩みや不安の有無、子どもの育てやすさなど11項目で構成した。

#### 2) coparentingに関する質問紙

武石ら（2017）がFeinbergの作成したCRSを翻訳、逆翻訳し、CRSとの概念の同一性と表面妥当性を確保した「日本語版coparenting関係尺度（以下CRS-J尺度とする）」を開発者の許可を得て使用した。CRS-J尺度は、7つの下位尺度35項目からなり、全く当てはまらない／全くない（0）～とてもよく当てはまる／とても頻繁に（6）の

7段階リッカート尺度である。「子どもの前でのもめごと」（7項目）と「阻害」（6項目）はcoparentingの否定的側面を捉えており、高得点であるほどcoparentingが調和的でないことを示す。反対に、その他5つの下位尺度、「育児の合意」（4項目）、「育児による親密性」（5項目）、「サポート」（6項目）、「パートナーの育児の承認」（7項目）、「家事・育児の分担」（2項目）は、高得点であるほどcoparentingが調和的であることを示す。CRS-Jの信頼性については、Cronbach's  $\alpha$  信頼性係数は尺度全体で0.856、下位尺度では0.754-0.950と良好な結果であり、内的整合性が確保されている。妥当性については、日本語版の作成過程で、オリジナル版CRSとの概念との同一性を考慮したことにより表面妥当性を、それぞれ信頼性・妥当性が検証されている夫婦間調整テスト（Marital Adjustment Test: MAT）（三隅ら, 1999）と夫婦ペアレンティング調整尺度（Coparental Regulation Inventory）（加藤ら, 2014）を用いて基準関連妥当性を検証している。また、弁別／収束的妥当性については、全7つの下位尺度における収束的相関数により、検証している。さらに構成概念妥当性については、因子間相関、確証的因子分析により、妥当であると結論付けている。

#### 3) 家族サポートに関する質問紙

野嶋ら（1993）により開発された「家族からのサポートに関する質問紙（Inventory of Support from Family）」に岸田（1993）により育児期にある家族を対象とした質問項目4つを追加したものを開発者の許可を得て用いた。

### 5. 分析方法

統計ソフトSPSS 22.0ver. for Windowsを使用し統計学的に分析した。フェースシートに関して記述統計を用い、CRS-J尺度の回答は、coparentingの各項目、下位尺度において母親、父親2群間のt検定を行った。次に、先行研究である武石ら（2017）の日本語版coparenting関係尺度の調査結果との比較を行うために、子どもが1人であるか、複数であるかによりcoparentingの平均値を算出し、本研究のCRS-J得点との比較を行った。また、開発者より提示さ

れた留意事項に従い、1歳以上の子どもを持つ親に対する今回の調査の際には再度信頼性係数をもとめ、データの内的整合性を確認した。また、家族からのサポートに関する質問紙 (Inventory of Support from Family) は記述統計、推測統計にて項目分析を行い、CRS-J質問紙間との関係をみるために記述統計として相関係数を算出した。

## 6. 倫理的配慮

本研究は、高知県立大学研究倫理委員会の承認 (看研倫18-32) を得て実施した。研究協力施設・研究協力者に対して研究の主旨、研究参加は自由意志に基づくこと、撤回の自由、守秘義務とプライバシーの保護、心身の負担や不利益への配慮、受ける利益や看護上の貢献、得られたデータの厳重な管理、統計的な処理による匿名性を保持した結果の公表について説明した。研究依頼施設へは口頭にて承諾を得、研究協力者には文書で説明し、調査への同意は質問紙の返送をもって確認した。

## IV. 結 果

保護者548組の質問紙を配布し、273名から回答を得た (回収率24.9%)。分析対象外5名 (子どもの数と年齢が不明である1名、子どもの年齢が0歳である3名、シングル世帯1名) を除外し、母親151名、父親117名、計268名の回答を分析対象とした (有効回答率98.2%)。属性は、平均年齢が母親35.0歳、父親37.9歳であり、就業形態は、「フルタイム」が母親75名 (49.6%)、父親96名 (82.0%) と最も多く、234名 (87.3%) の両親が働きながら子育てをしていた。また「夫婦共働き」が母親では126名 (83.4%)、父親では99名 (84.6%) と、高い比率であった。核家族世帯は243名 (90.7%)、養育児童数の平均は1.88人で、57.8%の夫婦が結婚して1年以内に子どもを迎えていた。

### 1. coparentingの実態、父親、母親の比較 (表1、2)

coparentingの各項目、下位尺度、合計得点において母親、父親の2群間での獲得得点の差をみるために t 検定を行った。coparentingの合計

得点の平均は母親 $2.4 \pm 0.9$ 点、父親 $2.8 \pm 0.7$ 点であり、母親よりも父親の方が有意に高い得点となった ( $p < .01$ )。

表1 父母間のCRS-J得点の比較

coparenting下位尺度	母親 平均得点	父親 平均得点	p 値
育児の合意	4.3±1.2	4.2±1.3	
育児による親密性	4.6±1.0	4.8±0.8	*
子どもの前でのめもごとサポート	1.1±1.0	0.9±1.0	**
阻害	3.4±1.6	4.2±1.1	**
パートナーの育児の承認	0.9±1.0	1.0±1.0	**
家事・育児の分担	3.8±1.3	4.6±0.9	**
家事・育児の分担	3.7±1.9	5.1±1.2	**
coparenting合計得点	2.4±0.9	2.8±0.7	**

次に、下位尺度毎の父母のcoparenting得点の比較では、7つの下位尺度のうち下位尺度全体として有意差があったものは、「育児による親密性」( $p < .05$ )、「サポート」( $p < .01$ )、「パートナーの育児の承認」( $p < .01$ )、「家事・育児の分担」( $p < .01$ )の4つの下位尺度であり、いずれの下位尺度も父親の方が有意に高い得点であった。一方で「育児の合意」、「阻害」の平均得点では、すべての質問項目や下位尺度全体においても、父母間の有意差はみられなかった。最後に、「子どもの前でのめもごと」は1つの質問項目のみ父母間の有意差がみられたが、下位尺度全体としての有意差はみられなかった。

質問項目について、「育児による親密性」(5項目)では、「私たちは親としての経験を通して一緒に成長している」という項目で、母親よりも父親の方が高得点であった ( $p < .05$ ) が、残り4つの項目に有意差はみられなかった。次に、「サポート」(6項目)では6項目すべてに父母間の有意差がみられ、いずれも父親の方が高得点であった。具体的には「夫/妻は私がかんばっていることやいい親であることをねぎらってくれる」( $p < .05$ ) や、「夫/妻は、私がかわが子にとって最高の親であると思わせてくれる」( $p < .01$ ) などという項目で父母の有意差がみられた。「パートナーの育児の承認」(7項目)では、「夫/妻は子どもに邪魔されるのが好きではない」という項目では有意差がみられなかったが、この項目を除いた、残りの6項目において有意差がみられ、父親の方が高得点であった ( $p < .01$ )。「家事・育児の分担」(2項目)では、「夫

表2 父母間のCRS-Jのt検定の結果 2群の平均得点の差の検定：tまたはwelchの検定 (\*\*：p<0.01,\*：p<0.05)

coparentingの低位尺度、項目 (R)は逆転項目		母親 平均得点 (標準偏差)	父親 平均得点 (標準偏差)	tまたは welch の検定	自由度	p値
育児の 合意	6 夫/妻も私も、育児の方針は同じである	4.0 (1.4)	4.0 (1.5)	0.09	266	
	9 夫/妻と私の子育てに関する意見は合わない (R)	4.7 (1.5)	4.5 (1.7)	0.66	266	
	11 わが子の食事や睡眠、そのほかの生活のことについて、夫/妻とは意見が合わない (R)	4.8 (1.4)	4.7 (1.4)	0.32	265	
	15 自分たちの子どもの行動に対しての許せる程度が、夫/妻とは一致しない (R)	3.9 (1.7)	3.6 (1.8)	1.41	266	
育児による 親密性	2 子どもが生まれる前に比べて、夫/妻との関係はよくなっている	3.7 (1.9)	4.1 (1.5)	-1.66	265.71	
	17 夫/妻が子どもと遊んでいるのをほほえましく思う	5.5 (1.2)	5.5 (1.0)	-0.34	266	
	24 私たちは親としての経験を通して一緒に成長している	4.6 (1.6)	5.0 (1.2)	-2.57	260.87	*
	28 親であることのストレスによって、夫/妻と私の気持ちが離れ始めている	4.9 (1.6)	5.2 (1.3)	-1.82	261.45	
子ども の前での めんど りごと	30 育児を通して将来の見通しを持つようになった	4.0 (1.6)	4.1 (1.6)	-0.14	263	
	31 ピリピリした感じやいやみな感じで夫/妻に接する自分に気づく	2.1 (1.7)	1.3 (1.3)	4.16	263.98	**
	32 子どもがいるところで、子どものことについて夫/妻ともめる	1.0 (1.2)	0.9 (1.1)	0.70	263	
	33 子どもがいるところで、子どもとは関係のない自分たちの関係性や夫婦の問題で夫/妻ともめる	0.9 (1.2)	0.9 (1.1)	0.02	263	
	34 子どもの前で、あなた方の一方または両方がお互いを傷つけるようなことやひどいことを言う	0.8 (1.2)	0.8 (1.2)	-0.20	264	
サポ ート	35 子どもに聞こえるところで怒鳴りあう (けんかする)	0.6 (0.1)	0.7 (1.1)	-0.46	264	
	3 夫/妻は、育児に関連した問題について、私に意見を求めてくれる	3.7 (2.0)	4.7 (1.4)	-4.96	260.78	**
	10 夫/妻は私がかんがっていることやいい親であることをねぎらってくれる	3.3 (2.1)	3.8 (1.8)	-2.40	260.37	*
	19 わが子の要求に対する一番いい方法を二人でよく話し合っている	3.4 (1.9)	4.0 (1.5)	-2.80	266	**
	25 私が一生懸命良い親としてがんばっていることに、夫/妻はとても感謝してくれる	3.5 (1.9)	4.2 (1.5)	-3.02	263.99	**
	26 夫/妻は、私が親として困り果てているとき、私が望む的確なサポートをしてくれる	3.3 (1.8)	4.1 (1.5)	-3.76	257.61	**
阻 害	27 夫/妻は、私がかが子にとって最高の親であると思わせてくれる	3.2 (1.9)	4.2 (1.7)	-4.39	260.81	**
	8 夫/妻と子どもの3人であるときよりも、自分と子どもの2人で遊んでいるときの方が気楽で楽しい	1.4 (1.8)	1.2 (1.7)	1.26	266	
	12 夫/妻は時々、私の親としての態度を、からかったり皮肉ったりする	0.9 (1.5)	1.2 (1.7)	-1.19	264	
	13 夫/妻は、親としての私の能力を信用していない	0.9 (1.4)	1.2 (1.5)	-1.62	265	
	16 夫/妻は、私よりも自分の方が子どもの世話が上手なところを見せようとする	0.8 (1.4)	1.0 (1.6)	-1.22	266	
	21 私たちが子どもと3人いると、夫/妻は私と競って子どもの注意を引こうとするときがある	0.5 (1.0)	0.6 (1.4)	-0.75	264	
パート ナー の育 児の 承認	22 夫/妻は私の育児をそれとなく批判する	0.8 (1.3)	1.1 (1.4)	-1.91	264	
	1 私は夫/妻がいい親だと信じている	4.7 (1.5)	5.0 (1.1)	-2.20	265.93	*
	4 夫/妻は子どもをととてもよく気にかけてくれる	4.4 (1.7)	5.2 (1.0)	-5.05	253.57	**
	7 夫/妻は親としての責任を果たすよりも、いまだに自分のことを優先したがる (R)	3.9 (1.9)	5.3 (1.2)	-7.29	253.77	**
	14 夫/妻はわが子の感情や要求に敏感である	3.0 (1.9)	4.0 (1.8)	-4.73	266	**
	18 夫/妻は、わが子に辛抱強く付き合っている	3.9 (1.8)	4.4 (1.6)	-2.30	266	**
家事・ 育児の 分担	23 夫/妻は自分を犠牲にしても子どもの世話を手伝おうとしてくれる	2.8 (2.0)	4.4 (1.7)	-6.95	261.28	**
	29 夫/妻は子どもに邪魔されるのが好きではない	3.9 (1.9)	4.0 (1.8)	-0.56	264	
	5 夫/妻は子どもと遊ぶのは好きだが、汚れ物の後始末などは私にまかせる (R)	3.6 (2.3)	5.0 (1.5)	-6.10	261.32	**
	20 夫/妻は育児を公平に分担してくれない (R)	3.8 (2.1)	5.3 (1.4)	-6.82	257.46	**
coparenting合計得点		2.4 (0.9)	2.8 (0.7)	-4.12	246.24	**

／妻は子どもと遊ぶのは好きだが、汚れ物の後始末などは私にまかせる (R)」、「夫／妻は育児を公平に分担してくれない (R)」の2項目すべてにおいて父母間で有意差がみられ、父親の方が高得点となった。

一方、これら父母間で有意差があった項目の

中で唯一、「子どもの前でのめごと」の、「ピリピリした感じやいやみな感じで夫／妻に接する自分に気づく」という項目のみ、父親よりも母親の方が高得点であった ( $p < .01$ )。また、本研究のCRS-J尺度全体のCronbach's  $\alpha$  信頼性係数は0.812であった。

表3 先行研究と本研究のCRS-J得点の比較

coparenting 下位尺度	母親			父親		
	武石ら (2017) (n=100)	本研究 (n=151)	p 値	武石ら (2017) (n=100)	本研究 (n=117)	p 値
育児の合意	4.4±1.1	4.3±1.2		4.3±1.2	4.2±1.3	
育児による親密性	4.0±1.2	4.6±1.0	**	3.9±1.2	4.8±0.8	**
子どもの前でのめごと サポート	1.1±1.0	1.1±1.0		0.9±1.1	0.9±1.0	
サポート	3.3±1.6	3.4±1.6		3.6±1.3	4.2±1.1	**
阻害	1.2±1.2	0.9±1.0	**	1.6±1.4	1.0±1.0	**
パートナーの育児の承認	3.5±1.3	3.8±1.3	*	4.2±1.1	4.6±0.9	**
家事・育児の分担	3.6±1.8	3.7±1.9		4.5±1.4	5.1±1.2	**
coparenting合計得点	2.2±0.9	2.4±0.9	*	2.4±0.9	2.8±0.7	**

(\*\* :  $p < 0.01$ , \* :  $p < 0.05$ )

## 2. 先行研究との比較 (表3)

武石ら (2017) の先行研究である「第1子の0歳児を養育する両親」のcoparenting合計得点 (母親2.2±0.9点、父親2.4±0.9点) と本研究の「1-5歳の幼児期にある子どもを養育する両親」のcoparenting合計得点 (母親2.4±0.9点、父親2.8±0.7点) を比較するためにt検定を行った。結果、母親 ( $p < .05$ )、父親 ( $p < .01$ ) 共に有意差があり、本研究のcoparenting合計得点の方が父母共に高い結果となった。

次に、下位尺度毎の比較では、母親は「育児による親密性」 ( $p < .01$ )、「パートナーの育児の承認」 ( $p < .05$ ) の2つの下位尺度で本研究の方が有意に高い得点となり、「阻害」 ( $p < .01$ ) では、本研究の方が有意に低い得点であった。一方父親は「育児による親密性」 ( $p < .01$ )、「サポート」 ( $p < .01$ )、「パートナーの育児の承認」 ( $p < .01$ )、「家事・育児の分担」 ( $p < .01$ ) の4つの下位尺度で本研究の方が有意に高く、母親と同じく「阻害」 ( $p < .01$ ) は、本研究の方が有意に低い得点であった。

これらのことから、母親、父親共に「第1子の0歳児を養育する両親」よりも、本研究の対象である「1-5歳の幼児期にある子どもを養育する夫婦」のほうがcoparentingの肯定的な要素となるいくつかの下位尺度、coparenting合計得点において有意に高い得点となり、ネガティブ

な要素である「阻害」の得点は低いことから、coparentingが調和的であった。

## V. 考 察

本研究の結果より、幼児期の子どもを養育する夫婦のcoparentingには性差がみられ、coparentingは子どもの成長や家族の発達とともに変化しうるものであると考えられた。そこで父母のcoparentingにおける性差と、子どもや家族の成長発達に伴うoparentingの変化、2点について考察する。

### 1. coparentingの性差

CRS-J尺度の合計得点において、父親が母親より有意に平均得点が高いことは、母親よりも父親の方が“パートナーとともに育児に取り組んでいる”という認識を持っているということを示している。これは武石ら (2017) の先行研究においても同様であった。性役割分業観の影響が根強い日本では、男女共同参画社会の実現が推進される今日でも、男性が子育てに関わる時間は少ない実態がある。夫の「家事・育児時間」は妻の就業状況により差が無く、60分弱から80分前後に微増したものの、夫が「仕事」に多くの時間を使っている状況は変わらない (男女共同参画局, 2016)。そのため子どもの世話は

“母の手で”というのが日本の育児の特徴でもある(柏木, 2011)。しかし、本研究の結果からは、父親は母親よりも“パートナーと一緒に育児をしている”という認識をしており、ここに父親が実際に関わる育児量や時間との乖離が生じている。

また、各下位尺度の平均得点でも性差がみられており、「育児による親密性」の下位尺度全体の平均得点は父親の方が高く、母親よりも父親の方が、子どもの発達やパートナーの成長について、親として協力する経験を共有する喜びを感じていた。「私たちは親としての経験を通して一緒に成長している」の項目で、母親に比べて父親が、より親としての経験によるパートナーとの成長を認識していることから、当たり前の中で育児がある母親に対し、少ない時間の中で育児に取り組む父親が、親として育児に協力しているという経験を強く捉え、より「育児による親密性」を認識しているのではないかと考える。また、「サポート」では下位尺度全体、またすべての項目において父親の方が高得点であるという結果であり、父親の方がパートナーである母親からの「サポート」を感じていた。こうした結果から母親が、短い時間で育児に関わる父親の育児関与を促進したり、能力を肯定する関わりをしていることが伺え、そのため父親は、母親からの「サポート」である、ねぎらいや感謝を強く感じ取っていると考える。また、「サポート」には、その場にはいないパートナーのことをポジティブに子どもに話すことで、間接的に相手のペアレンティングを促進する行為も含まれる(McHale, 1997)ことから、母親は父親の不在時に、子どもが父親の存在を感じることができるような関わりを行っていることも考えられる。また、「夫／妻は私がかんばっていることやいい親であることをねぎらってくれる」や、「夫／妻は、私がかんばっていることやいい親であることをねぎらってくれる」などの項目で、父親が母親に比べ高得点であるという結果からは、日本の子育てにおける一次養育者としての母親と、「手伝う、サポートする」という、二次養育者としての父親の存在が浮き彫りとなっている。母親の手で行う育児に特別感はなく、当然という考えから、父親がそのことをねぎらう機会は

少ない。その為母親は育児をする親としての自身への理解や支持を、パートナーである父親から受け取る機会が少ないと考えられる。こうした結果から、性別役割分業観の根強い日本の育児環境としての、「助ける」、「補う」という父親像が根深いことは、父母のcoparentingにおける性差の一要因になりうると考える。

また日本は、家事分担の公平感の男女差が31の国・地域の中で最も高い(村田ら, 2015)ことが明らかにされており、本研究でも「家事・育児の分担」の項目、下位尺度全体で、母親は父親に比べ得点が低く、母親の方が家事・育児の分担に公平さを感じていないという結果がみられる。さらに「パートナーの育児の承認」では、下位尺度全体、また7項目中6項目で父親の得点が高く「夫／妻はわが子の感情や要求に敏感である」、「夫／妻は、わが子に辛抱強く付き合っている」などの項目で、父親が母親のペアレンティングを承認しているほど、母親は父親のペアレンティングについてポジティブな捉えができていないことが明らかとなった。これらの結果を見ると、今後はさらなる父親の家事育児への参加の推進とともに、父母の捉える育児というものをすり合わせていく中で、パートナーの育児を母親がどのように捉え、協働していくかが課題となると考えるが、一方ではMaternal Gatekeepingという概念が言われている。中川(2010)は、Maternal Gatekeepingを妻の育児・家事への責任意識とし、妻の家庭責任意識と育児家事遂行が夫の育児家事行動を制約していると述べている。今村(2019)は、「縄張り意識」と「諦め」は、家庭内ゲートキーパーにおいて日本の独自性を表すと述べており、家庭内で重要な位置を占める育児家事という領域に母親自身が固執し、父親にその領域を明け渡すことに抵抗を感じる母親の心理状態を明らかにしている。今回、先行研究では父母間で性差のあった「阻害」で父母の差はみられず、明らかなゲートキーパー的存在となる母親の存在があるかはわからないが、子どもと両親で同じ空間にいるときに「ピリピリした感じやいやみな感じで夫／妻に接する自分に気づく」という項目において母親のほうが、父親に比べ高得点であったことから、子どもの前で母親が、無意識

のうちに不快感や抵抗感を表す雰囲気です。パートナーである父親に接している可能性があることがわかる。そして、先に述べたように母親が父親の育児をポジティブに捉えにくいことや、このように無意識に不機嫌で批判的なサインを表出する母親の態度は、結果的に夫を寄せ付けないゲートキーパー的な存在として認められる可能性がある。

これらのことから、パートナーの育児行動をどのように捉えるかということや、子どもと両親の三者で過ごす場での相互作用などで規定されるcoparentingにおいて、性差のある結果がみられることは当然である。しかしそれらは単に、父親側の育児参加量や意識の問題のみならず、パートナーの育児を承認しづらく、無意識に態度に表出するなどといった母親の認知や行動の影響も大いにあるといえる。これまで述べてきたように父親は、「育児による親密性」を認識し、母親からの育児の「サポート」を感じ取っており、それには母親の肯定的な関わりが不可欠であり、そういった関わりをしながら父親を支持している母親の一面が見える。しかし、一方で母親には、「家事・育児の分担」では公平感を抱きにくく、「育児の承認」において父親の育児をポジティブに捉えることが難しいことや、無意識に態度に不快感を表出しているというアンバランスな状況がある。これは母親が、父親としてのパートナーを支持したいという思いと、現実のパートナーとの育児の中で抱く葛藤を表しているとも推測できる。例えば、育児の分担の項目の中にあるように、「夫／妻は子どもと遊ぶのは好きだが、汚れ物の後始末などは私にまかせる (R)」などの項目で、父親に比べ母親が強くそのように感じているという結果は、育児という営みを遂行する毎日の中での、父親の捉える育児や育児行動と、母親のそれとが乖離している状況を表しているのではないかと考える。

以上のことから、「育児の合意」や「阻害」に父母の差はなく、おおむね育児の方針や方向性は一致し、互いの批判や批難はないような結果がある中で、それでも、「パートナーの育児の承認」や「サポート」、「家事・育児の分担」に性差が生じていることについて、父母双方の捉え

る育児の大まかな方向性の一致だけでなく、日々の家事・育児における細かな調整や分担について双方が十分に話し合う中で互いの育児を承認しつつ、サポート的な関わりを互いに認識し、理解していくことこそが、coparentingにおける父母の性差を埋めつつ、調和的なものとしていくことに必要となると考える。このことから看護者には、共に取り組む育児への考え方や行動には性差があることを念頭に置き、これには子どもを含む夫婦双方の親という役割における関係性の影響が大きいことを理解する必要がある。また、母親の負担軽減のために父親に育児に取り組んでもらうという視点でなく、夫婦双方がともに育児を「家族全体の取り組み」として認識し、責任を同じものとしていくことを目指し、互いにサポート的に子育てに取り組めるよう、支える看護が必要である。その為に、母親が家事育児を自己責任として抱え込むことがないよう見守り、委ね任せることの必要性を伝えることや、父母双方のオープンな関係性やコミュニケーションを促進することにより、互いに相手の育児への捉えや考えを理解できるような関わりが必要となると考える。

## 2. coparentingの変化と発達

武石ら (2017) のCRS-J得点と本研究結果との比較では、本研究におけるCRS-J合計得点が父母ともに有意に高く、武石らの対象者である、「第1子の0歳児を養育する両親」よりも、本研究の「1-5歳の子どもを養育する両親」のほうがcoparentingは調和的であり、父母ともに「ともに育児をしている」という認識をしていることが明らかになった。

0歳の乳児と1歳以上の幼児では、子どもの発達に伴う育児行為に大きな差がある。発語や始歩がみられる幼児期は、授乳やおむつ交換などの一次的な世話が主となる0歳児とは育児への取り組みが大きく変化する。山瀬 (2005) は、父親の育児感と育児行為に関して、父親が考える父親の育児行為は、主に教育や遊びに関する行為、家庭を経済的に支えることであり、一次的な世話はあまり父親の育児行為であると考えられていないことを明らかにしている。また、母親も一次的な世話に関しては、あまり父親の

育児行為とは考えていない、と言われている。母親を中心とした一次的な世話が主である0歳児の育児とは違い、遊びや教育、しつけといった要素が大きくなる幼児期の育児においては、子どもの運動、認知、社会情動的発達と共に、父親も育児に関与することが求められる。特に子どもの自我が形成され、ギャングエイジと呼ばれる3歳前後の子育てをする時期は、父母が互いに子どもの欲求や癪癢に向き合い、子どもの欲求としつけとのバランスや、子どもの特性をみてどのように対処していくのか、父母のチームとしての子育て力が問われる時期である。本研究の結果からは、この時期にある父母が「親密性」を高め取り組んでいることが予測される。また、子どもの発達に伴った遊びの拡大、外出機会の増加、保育施設への入所などにより、夫婦が仕事や家庭役割を調整し、認め合って協力する機会が増えると考えられ、このことが「パートナーの育児の承認」を高め、より「サポート」を知覚することにつながっていると考えられる。またDuvall (1985) は、家族は各発達段階特有の発達課題に取り組んでいると述べており、本研究の対象である家族は「子どもが役割を取得できるように育てる」ことや「親役割と夫婦役割を調整する」といった家族の発達課題に取り組む中で、家族内で互いにサポートを提供する時期にある。このような役割遂行やサポートを提供する中で、父母ともに育児に向き合う姿勢や意識が肯定的に変化し、「阻害」の要素が減り、より調和的なcoparentingにつながったと考えることができる。

また、本研究では特に父親の方が、先行研究と比較してcoparentingがより調和的となった。父親は子どもの発達に伴い、自分自身の関わりに対する子どもからの反応が増え、より子育ての喜びや満足感を得るといった変化もあるのではないかと考える。父性は後天的なもので、家族間の関係性の中で発展していくもの（デッカーら、2015）と言われているように、母親に比べ父親役割の意識は、子どもとの接触や日々の関わりによって徐々に高まると言われている。このことから、子どもの年齢や発達とともに、積極的に父親の育児関与がなされることは、coparentingに調和をもたらすと考えられる。Jia

(2011) が、coparentingは父親の育児関与により高まることを明らかにしているが、本研究の対象となった1-5歳の子どもをもつ父親においても、子どもの成長発達に伴い父親の育児関与が増えることで、結果的に武石らの0歳児を養育する父親よりも、coparentingが調和的となったと考えられる。

さらに、0歳児を育てている女性は、育児休業を取得している者が多く、武石ら(2017)の研究でも産休・育休及び無職の割合が約80%と高かったが、本研究では1歳以上の子どもを養育している親を対象としたことから、共働きの親が多かった。共働きでは、より育児への協力体制が求められ、「ともに育児をしている」という認識につながりやすいと考える。

また梅田(2018)は、乳幼児を育てる共働き夫婦の育児における協働の構成因子について、夫婦が支障をきたさずに仕事と育児を両立できるよう、バランスよく調整することに協働していることを示唆する結果を明らかにしている。このような両親のワークライフバランスに関連した調整行動が互いの育児関与の認識に繋がり、coparentingを調和的にしたとも考えられる。育児時間そのものについては、6歳未満の子どもを持つ1週間の夫・妻の育児時間は末子が小さいほど夫、妻ともに長く、その差も大きいことが明らかになっている(総務省統計局, 2011)。一方で0歳児を養育している男女よりも、本研究の幼児を育てる父母のCRS-J尺度の合計得点が高くなったことは、coparentingが単に育児や家事の量的な分担や育児関与の時間により決定されるものではないことを示しており、子どもの成長発達に伴い親同士や家族というシステムの中で両親が互いの子育て関与を承認し、親密性を高め、サポートを認識しながら変化し、発達していくものであるといえる。

以上のことから、看護者が、子どもの成長や家族発達に伴うcoparentingの変化を支持し、肯定的なフィードバックを行うことや、家族発達を促進していくことは重要な支援となりうる。また、夫婦双方が「育児に対する責任は同じ」という新たな視点のもと、互いの協力体制について理解し合い、子どもや家族の成長や発達を認識する中で、協力して育児に取り組むことで

調和的なcoparentingとなることを支えていく看護支援が求められる。

### 3. 研究の限界と今後の課題

coparentingの概念は、日本では普及し始めたばかりであり、我が国の文化の中でどれだけ一般化し、育児の実態として捉えることができるか、今後の研究において明らかにしていく必要がある。また、本研究では、対象の父母の人数に差があり、地域も限定的であることから、育児期にある子どもを養育する両親のcoparentingの実態の一部分を捉えたにすぎない。今後多様な家族の在り方や、ジェンダーレスな視点で、育児期にある家族を捉えなおすことや、ペアデータによる分析の必要もでてくるであろう。

## VI. 結 論

本研究におけるcoparentingには父母間で性差がみられ、母親に比べ父親の方が、“パートナーと共に子育てに取り組んでいる”という認識をしていた。また、先行研究との比較では、先行研究の対象である「第1子の0歳児を養育する両親」よりも、本研究の「1-5歳の幼児を養育する両親」の方が調和的なcoparentingであり、coparentingは子どもの成長や家族の発達と共に変化し、発達していくものであると考えられた。

これらから、夫婦が互いに育児への責任は同じという視点を持ち、双方のオープンな関係性やコミュニケーションを促進する看護、子どもの成長や家族発達を促進しながら、父母が親として良好な関係性の中で子育てに取り組むことを支える看護支援への示唆を得た。

**謝辞** 本研究にご協力いただきました対象者の皆様、また対象者の選定にご尽力いただきました研究協力施設の皆様に心より感謝いたします。本研究は平成30年度高知県立大学看護学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正したものである。本研究において申告すべき利益相反事項はない。

### 引用文献

青木聡子 (2009a) : 幼児をもつ共働き夫婦の育

- 児における協同とそれにかかわる要因 育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して, 発達心理学研究, 20(4), 382-392.
- デッカー清美, 丸山昭子 (2015) : 父親認識に関する文献研究, 日農医誌, 64(4), 718-724.
- Duvall, E. M., Miller, B. C. (1985): Marriage and family development (6th ed.), 157-184, Harper & Row Publishers, New York.
- York, 1985Feinberg, M. E. (2003): The Internal Structure and Ecological Context of Coparenting: A Framework for Research and Intervention. Parent Sci Pract. 3(2): 95-131.
- 今村三千代 (2019) : 父親の育児家事参加と母親の育児不安の検討—家庭内ゲートキーパーに着目して—日本教育心理学会総会発表論文集, 61(0), 517.
- Jia, R., & Schoppe-Sullivan, S. J. (2011): Relations between coparenting and father involvement in families with preschoolaged children. Developmental Psychology, 47(1), 106-118.
- 柏木恵子 (2011) : 父親になる, 父親をする, 東京, 岩波書店.
- 片岡優華 (2016) : 妊娠期から育児期における夫婦の葛藤と意思決定に関する文献レビュー, 創価大学看護学部紀要, 3-13.
- 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司 (2012) : 母親のgatekeepingに関する研究動向と課題 夫婦ペアレンティングの理解のために, 東北大学大学院教育学研究科研究年報 61(1), 109-126.
- 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司 (2014a) : 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討, 心理学研究, 84(6), 566-575.
- 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司 (2014b) : コペアレンティング: 子育て研究におけるもうひとつの枠組み, 東北大学大学院教育学研究科研究年報 63(1), 83-102.
- 亀崎明子, 田中満由美, 前本京他 (2018) : 未就学児をもつ父親の育児困難感の実態と関連要因の検討, 母性衛生学会誌, 59(2), 383-389.
- 岸田佐智 (1992) : 出産後4カ月児をもつ母親の妊娠, 出産, 育児に関する実際 (第1報) 母親の児への愛着の視点から, 高知女子大学紀要, 40, 89-97.

- 岸田佐智 (1993) : 生後4カ月児をもつ母親の児への愛着, self-Esteem, 家族サポートの関係およびその影響要因 (第2報), 高知女子大学紀要, 41, 89-98, 1993.
- McHale, J.P. (1997): Overt and covert coparenting processes in the family. *Family Process*, 36, 183-201.
- McHale, J.P. & Lindahl, K.M. (2011): Coparenting: A Conceptual and Clinical Examination of Family Systems.
- 松永佳子 (2014) : 出産後の家事や育児行動に対するカップル間のギャップと関係性満足度, 日本母子看護学会誌, 7(2), 22-32.
- 三隅順子, 森恵美, 遠藤恵子 (1999) : 夫婦間調整テスト (日本語版) の作成, 母性衛生, 40(1), 160-167.
- 村田ひろ子 (2015) : 家庭生活の満足度は, 家事の分担次第? ISSP国際比較調査「家庭と男女の役割」から, 放送研究と調査 65(12), 8-20.
- 内閣府男女共同参画局 (2016) : 「平成28年社会生活基本調査」の結果から～男性の育児・家事関連時間～[http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k\\_42/pdf/sl-2.pdf](http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k_42/pdf/sl-2.pdf) 2022/2/8アクセス
- 内閣府資料 (2016) : 少子化社会対策 <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2016/28pdfgaiyoh/28gaiyoh.html> 2022/2/8アクセス
- 中川まり (2010) : 共働きの妻における家事のゲートキーピングと夫の家事参加との関連性, 日本家政学会誌, 69, 12.
- 中島久美子, 早川有子, 常盤洋子 (2016) : 妊娠期および産後における夫婦の関係性 夫婦関係満足度, 妻が満足と感じる夫の関わりとの関連, 母性衛生学会誌57(1), 82-89.
- 野嶋佐由美, 岸田佐智, 中野綾美 (1993) : 家族からのサポートに関する質問紙の開発, 高知女子大学紀要, 41, 71-78.
- 大島聖美 (2015) : 夫婦関係の子どもの養育 夫婦間のコペアレンティングに向けて, 広島国際大学心理学部紀要, 3, 79-90.
- 小川佳代, 舟越和代, 三浦浩美 (2009) : 保育園児の母親のわが子に抱く感情と養育行動との関連, チャイルドヘルス, 12(2), 126-129.
- 佐藤ゆかり, 藤田愛, 山口咲奈枝 (2020) : 生後4～8カ月の児を初めて持つ父親のうつ傾向の実態調査, 北日本看護学会学術集会プログラム・抄録集 23回 Page27.
- 住田正樹, 中村真弓, 山瀬範子 (2010) : 幼児をもつ親の役割意識に関する研究, 放送大学研究年, 27, 25-33.
- 総務省統計局 (2011) : 社会生活基本調査 <https://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou2.pdf> 2022/2/8アクセス
- 武石陽子, 中村康香, 川尻舞衣子他 (2017) : 日本語版コペアレンティング関係尺度 (CRS-J) の信頼性・妥当性の検証, 日本母性看護学会誌, 17(1), 11-20.
- 寺見陽子, 南憲治 (2017) : 父親の家事・育児意識と行動の変容とその要因に関する研究 2000年と2011年のデータ比較を通して, 神戸松蔭女子学院大学研究紀要 6, 119-135.
- 梅田弘子, 島谷智彦, 長沼貴美 (2017) : 乳幼児を育てる共働き家庭の家族機能の特徴 夫婦それぞれの評価に着目して, 広島国際大学看護学ジャーナル, 14(1).
- 浦山晶美, 田中和子, 白石佳子 (2015) : 妊娠中における夫婦関係満足に関連する要因の検討, 山口県立大学学術情報 8, 1-4.
- Van Egeren, L.A. (2004): The development of the coparenting relationship over the transition to parenthood. *Infant Mental Health Journal*, 25, 453-477.
- Van Egeren, L.A.&Haukins, D.P. (2004): Coming to terms with coparenting: implications of definition and measurement. *Journal of Adult Development*, 11, 165-178.
- 吉沢豊予子 (2014) : 周産期に導入したい「コペアレンティング」という考え方 (特集 お父さんの「父親力」を高める), 助産雑誌, 68(9), 786-790, 医学書院.
- 山瀬範子 (2005) : 父親の育児参加に関する一考察—父親の育児行為に関する意識を中心に—九州大学大学院教育学コース院生論文集, 5, 119-134.